

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(4年計画の3年目)

## 1. 研究課

### 21世紀の人文学

Humanities in the 21st Century: An Attempt at Understanding Our Age

## 2. 研究代表者氏名

岡田暁生 小関隆 佐藤淳二

Akeo OKADA, Takashi KOSEKI, Junji SATO

## 3. 研究期間

2018年4月-2022年3月(3年目)

## 4. 研究目的

本研究の狙いは次の三点である： 1：私たちが今生きている、この息苦しく先が見えない世界 — それは一体なんであるのか、そしてそれはいつ始まったのかについて、それを「Humanitiesの危機」という相のもとに問う。それは同時に「21世紀の人文学 Humanitiesの可能性」についての存在論的問いともなるはずである。 2：本研究は必然的に、同時代についての社会科学的調査とは一線を画するものとして、人文学固有のアプローチを目指すこととなる。すなわち「この時代はいつ始まっていたのか」についての歴史的研究が中心となる。その際に1970年代が一つの焦点となるであろう。 3：本研究のもう一つの焦点は芸術である。すなわち「人文学の危機」と「芸術の危機」を、「人間性の危機」という点で同根のものと想定し、単に1970年代以後の芸術を研究対象とするのみならず、芸術創作に携わる人々との連携を深め、そこから人文学の可能性についての示唆を得ることを目標とする。本研究班は、歴史・思想・芸術という人文学研究の三本柱の間の密接な連携を深めるべく、敢えて岡田暁生・小関隆・佐藤淳二という三人の班長を立てることとする。これは、一人の班長（そしてその専門分野）へと研究成果を一元的に収斂させず、ディシプリン間の真の融合を目指すという意志を示すものである。

1. What is the current world in which we have been living without clear outlook for future? When did our age commence? These are the primary questions the project would investigate. The main hypothesis the project posits is that our age has been an age of the crisis of humanities. The hypothesis implies an inquiry into the validity of humanities as a distinct academic field in the 21st century. 2. In its examination of our age the project would adopt a historical approach. It is expected that the 1970s, a likely starting point of our age, will be a period to be most

intensively examined. 3. The project would pay much attention to the field of art, for the crisis of humanities and that of art seem to be two faces of the same phenomenon. The collaboration with artists is one of the characteristic aspects of the project.

## 5. 本年度の研究実施状況

本年度はコロナ禍のため対面研究会は中止せざるを得なかったが、6回の研究会をもち、そのほかに「生きるための人文学」と題した三回シリーズの動画を制作してYoutubeにアップした。後者はコロナ禍の人文学の発信の可能性を問うものとして、疫病と世界史（藤原辰史）、コロナ禍のEU（遠藤乾）、未来の音楽の可能性（三輪眞弘）を論じた。また研究会においてはズームはもちろん、テキスト回覧式の形式（あらかじめ発表者が原稿を参加者に回覧し、それに基づいて参加者がMLで応答する）が極めて充実した議論を可能にする形式であることを確認した。また現場のアーティストへの多様な分野の研究者からの聞き取りも実り多いものであった。共同研究においては、今後の人文学が「近代」のみならず、人間世界自体の終焉の可能性を見据えたものにならざるをえないという点に、議論が収斂しつつある。なお制作した動画は11月末にアップしたが、12月末日において合計約700回のアクセスがあった。

## 6. 本年度の研究実施内容

2020-06-05 オンラインによる音楽はいかにして可能か？ 発表者 三輪眞弘 情報科学芸術大学院大学

2020-06-21 ルーマン社会学紹介 発表者 藤井俊之 人文科学研究所

2020-07-10 山中透氏に1980年代日本のサブカルチャーを聞く 発表者 山中透 フリーアーティスト/DJ

2020-10-03 来し方と行く末：「未来は生きうるか」という問いからいまを考える 発表者 小野塚知二 東京大学経済学部

2020-09-23 動画制作「生きるための人文学」第二回 「コロナ危機下の欧州」 発表者 遠藤乾 北海道大学法学部 コメントーター 小関隆

2020-12-19 岡田暁生『音楽の危機』をめぐって 発表者 岡田暁生 発表者 森本淳生

2021-03-12 藤原辰史『農の原理の史的研究』をめぐって 佐藤淳二

## 7. 共同研究会に関連した公表実績

遠藤乾（講師）／小関隆（コメントーター）による動画『コロナ危機下の欧州』をYoutubeにアップした（「生きるための人文学」シリーズ第二回）：  
<https://www.youtube.com/watch?v=feBTA0qQMcI&t=1002s>

## 8. 研究班員

所内

岡田暁生、佐藤淳二、小関隆、森本淳生、藤原辰史、立木康介、藤井俊之、伊藤順二、上尾真道

学内

吉岡洋(こころの未来研究センター)

学外

王寺賢太(東京大学文学研究科)、長谷川貴彦(北海道大学文学研究科)、中野耕太郎(東京大学教養学部)、田辺明生(東京大学教養学部)、三輪眞弘(情報科学芸術大学院大学)、上田和彦(関西学院大学)、橋本伸也(関西学院大学)、坂本雄一郎(関西学院大学)

## 9. 共同利用・共同研究の参加状況

	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	2	7	0	1	1	0	25		1	6	
国立大学	2	5			1		19		1	2	
公立大学	1	3					12				
私立大学	2	3					14				
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関											
民間機関											
外国機関											
その他											
計	7	18	0	1	2	0	70	0	2	8	0
		(1)	(0)	(0)	(0)	(0)	(3)	(0)	(0)	(0)	(0)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数		
			うち国際学術誌掲載論文数
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	6		1
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)			
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	3		
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	1		1
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)			

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
『環世界の人文科学』(人文書院)	1	R. 2. 3	炭坑化する世界——空気を満たすテクノロジー	瀬戸口明久
Zinbun	1	R3. 2	European Crisis in Historical Perspective',	Serena Ferente&Takashi Koseki
西洋史学 270 号	1	R. 3. 2	「書評：ローベルト・ゲルヴァルト『敗北者たち：第一次世界大戦はなぜ終わり損ねたのか、1917-1923』」	小関隆
East Asian Journal of British History	1	R. 3. 2	Book Review: David Cannadine, Victorious Century: The United Kingdom, 1800-1906,	Takashi Koseki

『yomyom』 65 巻	1	R. 2. 11	空白の恐怖と地球の危機 コロナ禍での思考	藤原辰史
『論点・西洋史学』 金澤周作監修 (ミネルヴァ書房、2020年4月)	3	R. 2. 4	「移民史論」、「ナショナリズム論」、「革新主義とニューディール」	中野耕太郎

共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名
モーツァルト	岡田暁生	R2. 9	ちくま書房
音楽の危機	岡田暁生	R2. 9	中公新書
グレアム・ハーマン『思弁的实在論』：翻訳とあとがき	上尾真道	R2. 7	人文書院
イギリス 1960 年代：ビートルズからサッチャーへ	小関隆	R. 3. 2	中公新書
縁食論——孤食と共食のあいだ	藤原辰史	R. 2. 11	ミシマ社
農の原理の史的研究——「農学栄えて農業減ぶ」再考	藤原辰史	R. 3. 1	創元社

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由  
なし

12. 次年度の研究実施計画

四年目になる来年度はこれまで 3 年間の研究で焦点化していた「終末」をキーワードとした研究会を 8 回開催すると同時に、最終とりまとめへ向けた論点の収斂を行う。近代を支えていたあらゆる制度が崩壊しつつある現在、「人間」概念の解体は必然的に「人文学 Humanities」の瓦解をもたらさずにはおれない。来年度はポストモダンが喧伝されるようになった 1970 年代を歴史的に振り返ると同時に、当時すでに予感されていた人間の終焉が現実のものとなりつつある今日、果たして歴史学や思想や芸術学といった「人間」前提の諸学はいかにして生き残り得るか、その可能性と不可能性が 2021 年度の主題となる。

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

来年度も引き続き「生きるための人文学」シリーズの動画を制作してアップロードすると同時に、論文集の構想を具体化する。